『中央大學圖書館所藏漢籍目錄』

序

この度、中央大学図書館漢籍所蔵調査班による長年にわたる研鑽と調査の成果として『中央大學圖書館所藏漢籍目錄』が刊行の運びに至ったことはまことに意義深い事です。

中央大学は明治十八年の建学以来、実学の尊重をモットーとして掲げて来た校風も手伝い、漢籍、古典籍の貴重書、稀覯本の類の計画的購入や収書に関して従来必ずしも熱心であったとは申せません。加えて二度の火災に遭い、また大戦の戦火をも潜って来ました。それでも創設者、教員、学員の御厚志による度々の寄贈を受けて、徐々にその蔵書の点数を蓄積してまいりました。

古典籍がわが国固有の欠くべからざる文化遺産であることは言うを俟ちませんが、漢籍もまた上代より現代に至るまで、われわれ日本人の精神的骨格を形作って来た貴重な文化財です。にもかかわらず、戦後の数十年間、漢籍や古典籍への関心は一般的に低調であったと言わざるをえません。漸く昭和五十年代頃からこの風潮に反省が加えられ、有限な文化財としての漢籍・古典籍の保存と利用が真剣に意識され検討されるに至りました。

漢籍が有効利用されるための前提として、まずその書誌・目録の十全な整備がなされなければなりませんが、一般図書の分類方法とは全く異なる、中国清朝以来の四部分類と呼ばれる伝統的な独自の方法が採用されており、目録作成に際しては漢籍についての専門的な素養と作業上の経験的な技能が必要とされます。この点につきまして、漢籍研究会会員有志の長年のご協力は大変有難く、それ無しには本書の刊行も実現しなかったでありましょう。

漢籍所蔵調査班は、一九九四年以来、主として夏期休暇中の数日を漢籍の調査と研修に充てて弛まぬ努力を積み上げてきました。特に二〇〇一年以降は、毎月一回、高橋良政日本大学法学部教授を中心として、近在大学の図書館員有志が参集し、定期的に調査研究会を持ち、作業の一層の促進を図ってきました。そして二〇〇四年に至って調査用紙の記入を完了し、刊行にまで漕ぎ着けました。

このように資料の調査と目録作製の作業は十二年の長きにわたりましたが、その間、漢籍研究会会員の有志、中央大学図書館職員の諸氏から渝らぬ温かい協力と貴重な助言を賜りました。また、一九九九年の夏期調査研修会には、鈴木俊幸文学部教授をはじめ国文学研究科大学院生、文学部学生諸君らの多くの人々の参加を得、数々の支援と激励をいただきました。

ここに『中央大學圖書館所藏漢籍目錄』が公刊されることにより、専門研究者にとって飛躍的に利用の便宜が図られるばかりではなく、広く一般読書人の漢籍文化への関心が大いに高められることを願ってやみません。

二〇〇六年三月三十一日

中央大学図書館長
古城　利明